

図版② 何紹基臨書（部分）

張 ちょう 玄 げん 墓 ぼ 誌 し

普泰元年(531)
(北魏時代)

歴代墓誌銘にみる
書法の変遷⑧

木 雜

木 雜 室

伊 藤 滋



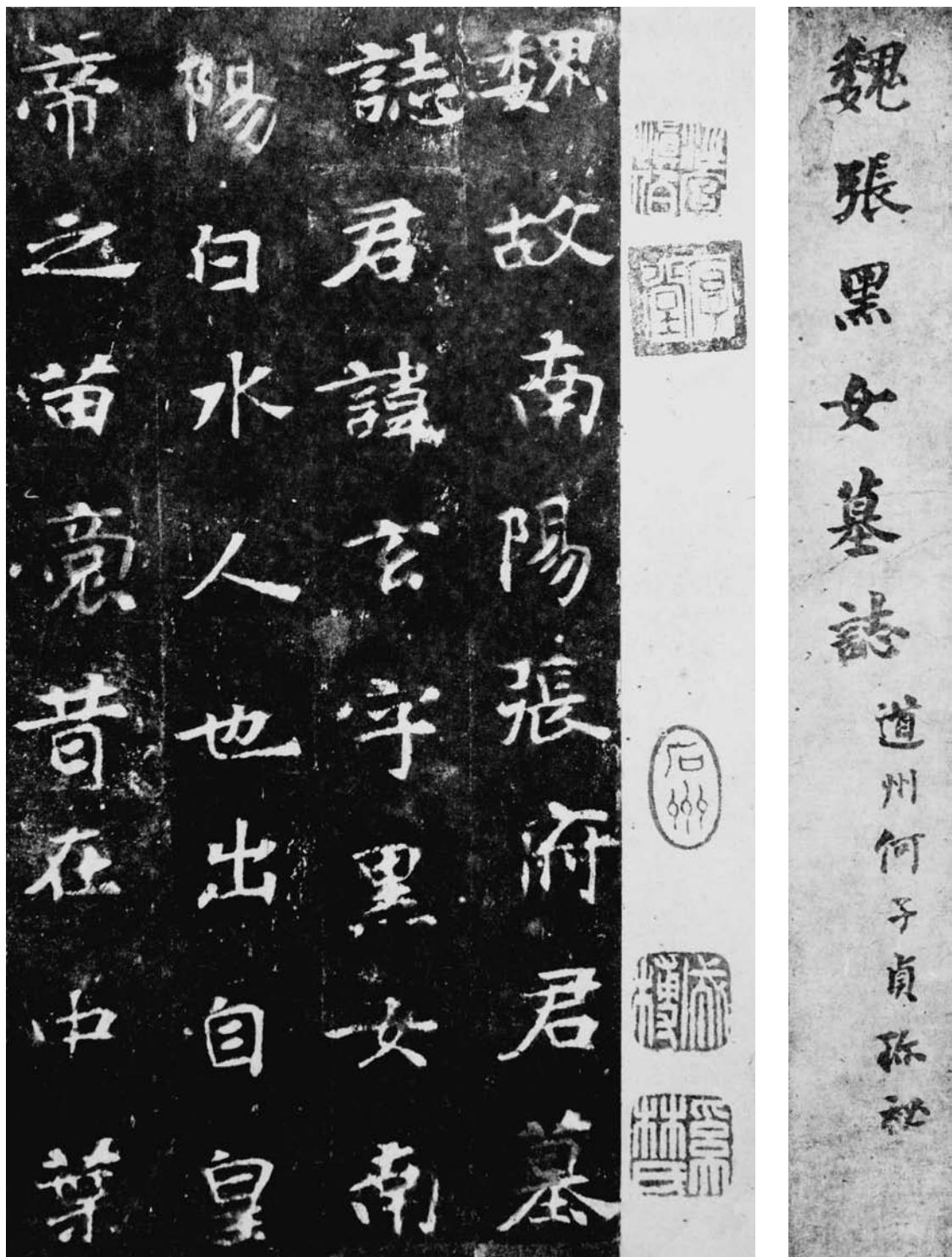
「張黒女墓誌」という名称が、よく使わってきた。正しい呼び方は、「張玄墓誌」であるが、清朝の皇帝の名と同じ文字が使用されているために、字（あざな）である「黒女」を用いて「張黒女墓誌」と呼ばれてきた。歴代墓誌銘のなかで、最も有名な楷書作品であろう。この墓誌が何時、どこで出土したは不明である。原石は早くに失われて、不思議なことに十六、十七世紀頃に取られたとされる拓本が、ただ一本（孤本）伝えられるだけである。清末の著名な書法家・何紹基（1799～1873）が、この孤本『張玄墓誌』の拓本を入手し、終生愛蔵して手放すことはなかった。文字の構成はやや横長で転折などは滑らかであるが、「之」の終筆などは力強く、北魏時代末の書でありながら、旧さと新しさの筆勢を具えた、伸びやかな楷書である。日本や中国の書法家に長きにわたり愛されてきた古典の一である。孤本とされる原帖拓本は、一時上海博物館に所蔵されたが、現在は個人所蔵と伝えられている。左の主図版は、戦前の上海で印刷されたコロタイプ本の巻頭頁である。また愛蔵していた何紹基の拓本の題簽と臨書を示した。

次号は隋時代の新出土の「楊休墓誌」です。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤 滋 メールアドレス mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

図版①



何紹基題簽

書道芸術院 平成の群像 (2011)



石井明子

「臣下研究中を曰さして」

2011年3月11日東北関東大震災を経て、自分の中で何かが大きく変わっていくのを感じています。

その日々の中、鮮明に思い出されたのが、「書くことは祈りです」という故中島邑水先生のお言葉でした。私は、いつもどの場で伺ったか覚えていないのですが、今、そのときの何倍も味わい深く、重みのあるものとして心に沁み通っています。人が物を書いた最初は大いなるものへの祈りであったと率直に理解でき、これから自分が、書き続ける大きな拠^{もと}となるものと信じることができます。

余震の中、ここ数年の制作について振り返ってみました。

現在、30代の頃に、心に入り込んだ過去の書状の形式と、佐

理の線に魅了され、その二つをヒントに制作しています。最初は紙面いっぱいに書いての不安な発表でした。「少し続けてみては…」と言葉をかけてくださる方があり、僅かずつでも動かしていきたいとの思いで、それを追っています。

そこに、余白が大きなテーマとして立ちはだかりました。本来、すべての騒騒しいものが嫌いで、静かな作品を心がけていますが、思いがそのまま描けないのは常のことです。余白が空しい白にならないように、白が描いた線を生かしてくれるように…等々と言葉としてわかつても、心も技も足りない私は、言い訳ではなく、亡き永井幸子先生の言葉を借りて、「臣下研究中」という他はありません。書く人すべてに共通とは思いますが、特にかなを書く者には、余白は永遠に答のない課題です。

私が理想とする書、これから創作したいものは、次です。
・静かで余韻の残るもの
・二次元が三次元に見えるもの

そのことを目標に、未だ好きになれない自分の書に、私も「臣下研究中」と真正面から言える姿勢で向きあつていきたいと願っています。



第62回毎日書道展出品

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

東日本大震災被災地視察報告

4月25・26日の2日間、毎日書道会糸賀靖夫専務理事と共に千葉蒼玄本院事務局長の案内で宮城県の被災地を視察お見舞いにお伺いした。4月25日10時30分羽田発の全日空便で仙台空港へ、正午前に到着 空港出迎えの千葉蒼玄氏の車で一路気仙沼へ向かう。仙台空港はまだ半身不随の状況であったが、米軍の協力で物資輸送のため復旧を始め、民間機も4月20日より運行が開始されたばかりであった。海岸近くに位置する空港周辺は家屋など何もなく、海岸の松林も根こそぎ倒れあちこちに散乱し原状をとどめているものは何一つない状況であった。

三陸自動車道は何か開通しており、気仙沼まで約3時間走行、途中石巻市内で案内役の高橋小汀さん（前・審）と合流、気仙沼市内にて現地の熊谷宗苑（現・評議員）、横田汀華（現・審）、武山櫻子（現・審）の3氏の出迎えをいただく。特に被害のひどい横田汀華さん宅を訪問。港に近くあたり一面瓦礫の山。大型船が打ち上げられた異様な光景の中、外観はしっかりと建っている。震災の直前に耐震工事を終えた

港はまだ半身不随の状況であつたが、米軍の協力で物資輸送のため復旧を始め、民間機も4月20日より運行が開始されたばかりであった。海岸近くに位置する空港周辺は家屋など何もなく、海岸の松林も根こそぎ倒れあちこちに散乱し原状をとどめているものは何一ぱかりという家屋は、骨組みがしっかりしていたのであるうか。しかし、中は見るも無残な有様で、ヘドロと家財がぐちゃぐちゃになっている。2階の天井付近まで水が入った痕跡がはっきり見られ、津波の規模が想像される。

地震当日は父親（96歳）と共に自宅におられ、たまたま訪れていた熊谷宗苑さんと共に命からがら避難され、何とか逃げ延びられたとのことである。お年寄りを抱え、その苦難は想像を超える。その後同じようく被災された武山櫻子さんのお稽古場を訪れた。建物の外観は残っているが中はめちゃくちゃで、あたりはヘドロ交じりで異様な臭いに包まれ、マスクをしても効果ないくらいであった。さらに院展などでも世話になっている恵比寿屋表具店の仮



石巻市・被災地にて
(左から熊谷・高橋・横田・辻元理事長・武山・毎日書道会 糸賀専務理事)

ぱかりという家屋は、骨組みがしっかりしていたのであるうか。しかし、中は見るも無残な有様で、ヘドロと家財がぐちゃぐちゃになっている。2階の天井付近まで水が入った痕跡がはっきり見られ、津波の規模が想像される。

地震当日は父親（96歳）と共に自宅におられ、たまたま訪れていた熊谷宗苑さんと共に命からがら避難され、何とか逃げ延びられたとのことである。お年寄りを抱え、その苦難は想像を超える。その後同じようく被災された武山櫻子さんのお稽古場を訪れた。建物の外観は残っているが中はめちゃくちゃで、あたりはヘドロ交じりで異様な臭いが痛むことばかりであった。

糸賀蒼玄さんの奥方、千葉紅雪さんに同行いただく。石巻高校の養護教諭として地震当日から避難所となつた高校で、生徒はもとより500余名の避難住民の対応で正に不眠不休の活動を現在もされている中、時間を割いてくださった。市内の被災状況は気仙沼と同じく、地震・津波・大火災に見舞われ、さらに1m以上の地盤沈下による影響もあり、黒こげになつた3階建ての小学校の有様など、多くの幼い犠牲者のことを思ふ心が痛むことばかりであった。

石巻市内から女川町へ、復旧が遅れている地区でやつと道路が開通したばかりで惨状は1か月半たつた今も生々しく、津波の破壊力のすごさを見せつけられた。午後、松島海岸から塙釜市内へ回り、浜田堂光先生宅を訪問、高台にあり被害はなかつたとのことだが

被災を受けられている。作品は宮城野書人会の皆さんのもとで、何とお見舞い申し上げてよいかわからない。そんな中から力強く再興されるという社長の不屈の魂に感激 每日展への対応も現在準備を進められないと伺つた。

2日目は石巻市内の状況を視察。千葉蒼玄さんの奥方、千葉紅雪さんに同行いただく。石巻高校の養護教諭として地震当日から避難所となつた高校で、生徒はもとより500余名の避難住民の対応で正に不眠不休の活動を現在もされている中、時間を割いてくださった。市内の被災状況は気仙沼と同じく、地震・津波・大火災に見舞われ、さらに1m以上の地盤沈下による影響もあり、黒こげになつた3階建ての小学校の有様など、多くの幼い犠牲者のことを思ふ心が痛むことばかりであった。

今回短い行程ではあったが、被災された現地を訪問し、事態の重大さを身体で感じられたことを大事にして、今後の支援活動などに役立てたい。
戴した。



気仙沼市・被災地
(黒こげになった小学校)

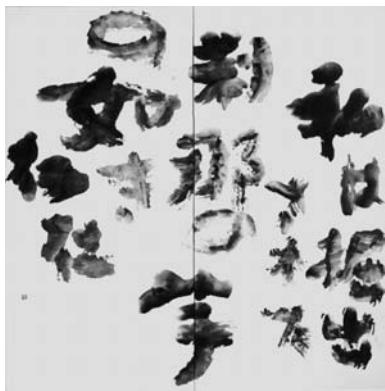
最後に仙台市内へ入り、宮城野書人会事務所を訪問、折から嵯峨大拙会長を中心に行員会が開かれており、今野深泉・及川聰助両副会長、狩野翠桂・坂本素雪・熊谷宗苑・木須翠苑・飯沼恵鳳・尾形澄神等各役員とお会いできお見舞い申し上げた。さらに長井四枝先生宅を訪問、夕刻には仙台駅にて毎日新聞仙台支局長・阿部海鶴・渡辺洋一両先生と宮城野書人会役員の皆様と共に夕食懇談させていただき震災の影響や今後の対応、特に毎日書道展仙台展の開催に向けていろいろご意見を頂戴した。

現代詩文書 (二)

佐藤無極



佐藤無極書



第21回書道芸術院展 毎日賞受賞作

第25回書道芸術院展 特別賞受賞作
佐藤無極書

寒さ厳しい東北での、濃墨、長峰での作品作りは墨が伸びず大変でした。そんな時に淡墨の滲じみ、潤筆、渴筆が全て初めて由に、墨、硯、紙、筆に無知であり、師、宮城野書人会の諸先生方に教えを請いながらの挑戦でした。

淡墨は硯、磨ってから約経過時間、磨った墨の使用部位、温度や湿度、紙質、運筆の速度等々により墨色が異なることを初めて体験をいたしました。

淡墨での作品は、白い紙面に入筆すれば躊躇している暇はなく、配字、空間処理等を瞬時の判断で書くという一発勝負の魅力を大いに感じたことを思い出します。

掲載上段右は、第21回書道芸術院展出品作です。当時は淡墨に漆膠を溶かして使用しており、膠の濃度、量による筆路の有無、特に滲の広がりなどは予測が難かしく、運筆の速度等々難しいことばかりでした。

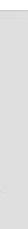
掲載左作品は、この詩に出合った時に、今までとは違う、白の生きた空間、透明度のある景色でとの思いから、膠を使っての滲じみ、墨色でなく、墨本来の墨色との考え方の基、師のご指導をいただきながら、試行錯誤の結果の作品です。

21世紀の書

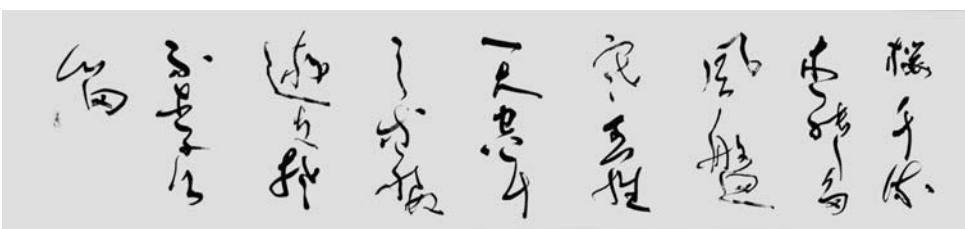
—私の主張—

かな (二)

大辻多希子



大辻多希子書



張瑞図より模書作品

「漢字とかな」

私の所属する書泉会では、年に一度会報が発行されます。巻頭には、会長の下谷洋子先生から新年度の抱負や、会員へのメッセージが掲載され、その記事を毎年楽しみに拝見し、内容を重く受け止めております。

入会してまだ間もない時の会報に、「漢字の使い方」についての記載がありました。

中の記事を読み、私が大字かな作品を創作する道しるべとなりました。まだ自分の基盤となる、かながない時期でもあり、好きな古筆を定めるには時間が必要でした。

初心者向けの古筆から臨書を始めて香紙切、との出会いがあり、特に香紙切の、穂先のよくきいた鋭く大胆な筆致で、軽快なりズムに乗った部分には心を動かされ、好んで臨書をしました。

漢字は、王鐸や張瑞図を選び、張瑞図の「飲中八仙歌」の思いきって誇張したような書きぶりに魅力を感じます。

無駄なように見える緻密な努力こそ速い歳月に対処する方法はないかもしれません。この師の言葉を実現出来るよう時間との闘いを続けています。

雜感三種

渡辺柱雲

(漢字部・審査会員)

書を通して、また教壇に立つ身として感じてることを書いてみたい。

【雑感その一…古文字学は楽しい!】

つい最近のことである。現代文の授業中のこと、「山月記」を教えていたときに気になる文字を見つけてしまった。虎になってしまった李徵が、自作の詩の伝録を友人に依託する場面である。その一説にはこうあった。「そうだ。お笑いぐさついでに、今の懐を即席の詩に述べてみようか。」なぜここで「オモウ」は「思う」ではなく、「懐」なのか。「懐」の文字を生徒に説明してみると、「懐のつくりの部分『眾(なみだ)』は、死者との愛惜を表す字。きっとここでは、詩人になりたかった人間・自分との決別を心の底から嘆き悲しんだから、「懐」の字を使ったんだね。」わざわざこの文字を選んで使った中島敦の凄さに、生徒と一緒に感動

させられた。「やっぱり、古文字学は、楽しいな!」と思う瞬間であった。

私が古文字学に興味を持ったのは、大学に入学が決まった時に従兄がプレゼントしてくれた一冊の本だった。古文字学会では知らない人はいない、故白川静先生の『字統』である。以来、白川先生の本を集めては、眺めること度々である。また最近では、白川先生の著書だけではなく、中国で出版された古文字学の本も買ってみては、広げて眺めている。もし、大学でまた学ぶチャンスがあつたら、古文字学をより深く学びたいと思う昨今である。

【雑感その二…大作と細字】

今年の夏、久しぶりに白扇展で大作の公募を行うことが決まった。何年前

を書いてお稽古に行つたところ、扇舟先生に「大きい紙に書くのだから、漢字二字ぐらいで大きく書いたらいい」とアドバイスを頂いた。体の小さな私が入れるぐらいの文字を書くのが実は大好きだと言うことを、扇舟先生は見抜かれていた。

近年高校の書道部ではパフォーマンス書道としての大作ブームである。その一方で、全国の総合文化祭や書の甲子園では、「紺紙金泥・細字の臨書で賞狙い」という傾向がある。学校によっては、細字作品ばかりの学校もある。もちろん、しっかりと古典の勉強をすることは賛成だし、勉強の過程としてゼントしてくれた一冊の本だった。古文字学会では知らない人はいない、故にには個性がある。細字が得意な子には得意な子、繊細な作品が得意な子。あるいは、大胆な作品を得意とする子もいる。私の指導している部活では、細字をさせるのも大切だ。しかし生徒が得意な子、繊細な作品が得意な子。あるいは、大胆な作品を得意とする子もいる。私の指導している部活では、文化祭にパフォーマンスもするし、全紙十枚の大作を書く生徒もいれば、仮名の臨書を出品する生徒もいる。個性は尊重すべきだ。

「その生徒一人一人の得意を伸ばしてあげることが大切」これが、種谷扇舟先生が教えてくださった教育論だ。細字も大作も出来る環境を整えてあげる事、そして指導する力を持つことが指導者には求められていると思う。長いこと書の作品を制作していくもの、自分の作品を表具したことのない人は多いと思う。表具の世界はミリ単位だ。掛軸は一ミリ狂うと歪んで見える、シビアな世界なのだ。

【雑感その三…表具のすすめ】

大学の授業で表具研究を履修した。先生は東京国立博物館の修復を担当されていた故・半田達一先生だった。授業は先生が東博の仕事を終えてから来られるので、18時ごろから始まり、作業の切れ目の悪い時には、22時を超えることもあつた。最初に教えていただいたのは、「利休屏風」少し小ぶりの屏風だった。障子の棟の様な枠に、何枚も何枚も和紙を貼っていく、緻密な作業。そして先生のこだわりは、作品を化粧するための布や紙。国宝の修復や、三の丸尚蔵館の御物の修復作業をする時などは、その時代の古布や古紙と同じ色になるよう、染織職人に依頼していた程であった。「白楽天詩巻」「屏風土代」「辻が花の袈裟」どれだけ貴重な修復を見せて頂いただろう。虫食いの紙が、同じ色の紙で修復されてゆく様は、手品のようであった。

私たち、そのような難しい作業をいつも簡単に専門の人任せている。自分の作品に責任を持つために、一度は表具に挑戦してみるのは如何だろうか。

平城遷都1300年祭
第9回国際書法交流奈良大展
 会期 2010年10月14日～19日
 奈良県文化会館

辻元大雲



「奈良人は秋の寂しさ見せじとや社も寺も丹塗にはせし」

70×150cm

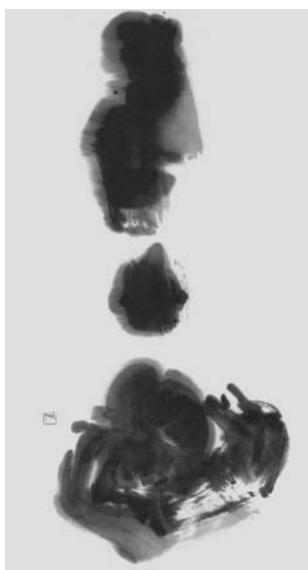
「卷」



恩地春洋

117×90cm

「こころ」



村野大仙

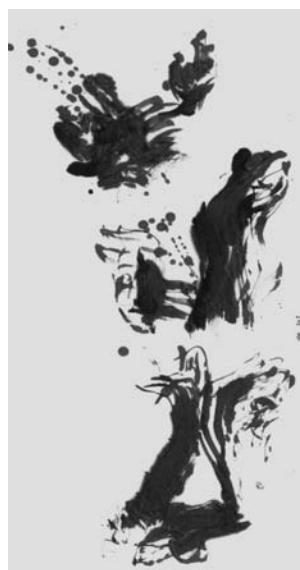
「絹」



小伏竹村

120×90cm

「受」

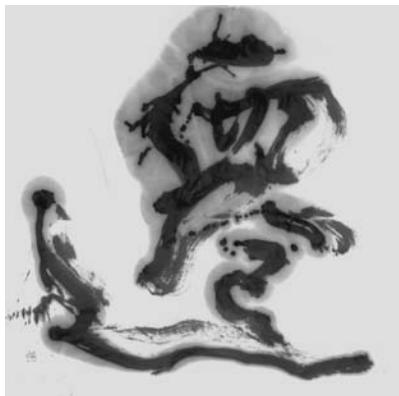


香川倫子

137×70cm

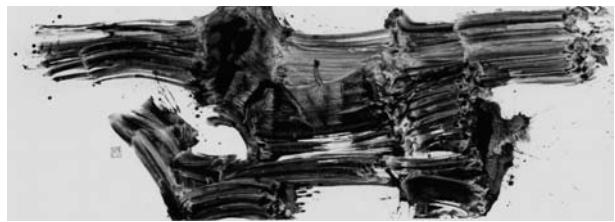
「遷」

大野祥雲



120×120cm

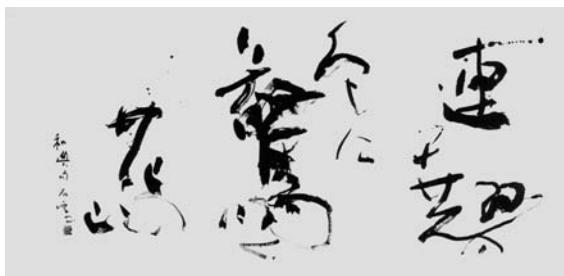
浜谷芳仙



「仙」

60×173cm

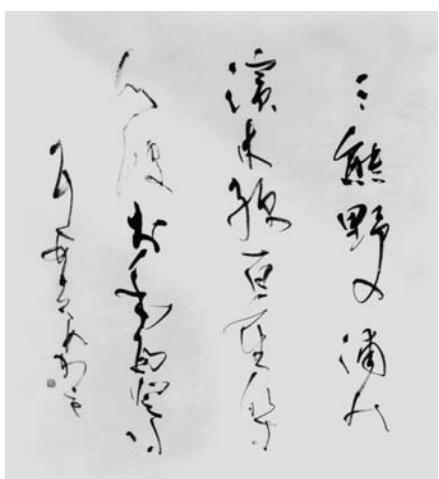
小竹石雲



「連翹の色に驚く花の山」

70×145cm

「み熊野の浦の浜木綿——」 下谷洋子



98×90cm

「地無舞」



山下皓映

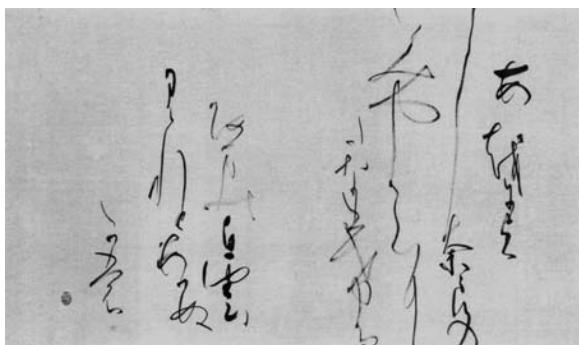
230×53cm

「無舞」 鳥山岳風



50×70cm

石井明子



「あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬかも」

70×117cm

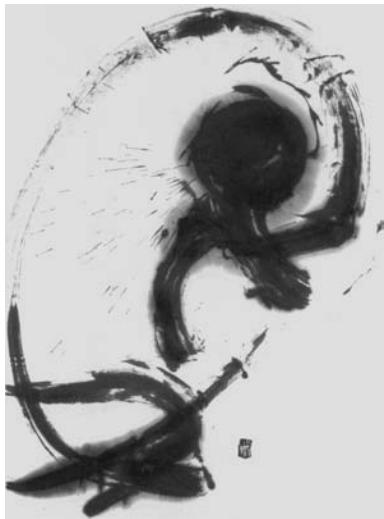
「廻りあいのうれしさ美しく」

飯高和子



89×65cm

〔好〕



小伏小扇

120×90cm

〔埼〕



小林琴水

90×120cm



秋篠宮ご夫妻ご来場
(恩地春洋会長ご案内される)

砂本杏花



「百千鳥 日曜の厚き朝刊百千鳥」 91×121cm

第64回書道芸術院展〈続〉

実行委員長

大野祥雲

海道支局の全作品を展示。

(実行委員長 嶋峨大拙)

(東北総局長 実行委員会)

右予定されていたが、3月11日、東

東京都美術館の改修に伴う2年間の全面閉館のため、64、65回展の開催について早くから検討を重ねてきた。平成22年6月18日開催された第64回

東京運営委員会において、展覧会の機構、特別賞選考委員、当番審査員並びに委員、事務局編成などを決定した。

○会場については、中央展・西日本展、東日本展の三会場での分散展示をすることになった。

中央展は平成23年2月1日(火)から6日(日)まで東京セントラル美術館・東京銀座画廊美術館で開催。院の主要役員をはじめ、上位入賞作品を展

芸研究部長島谷弘幸氏のお一人に依頼。評論家田宮文平氏、東京国立博物館学芸研究部長島谷弘幸氏の二人に依頼。2月1日、展覧会初日の記者会見の折に選考ごと批評をお願いした。ご高評は別掲の通りで、印刷して参考者に配布。作品への掲示も行った。

○外部評論家の眼
(担当 恩地春洋 辻元大雲)

恒例となった外部審査。今回は書道

評論家田宮文平氏、東京国立博物館学芸研究部長島谷弘幸氏の二人に依頼。2月1日、展覧会初日の記者会見の折に選考ごと批評をお願いした。ご高評は別掲の通りで、印刷して参考者に配布。作品への掲示も行った。

○記者会見
(担当 恩地春洋 辻元大雲)

2月1日、中央展会場にて行う。

○記念式典
(事務局長 千葉蒼玄)

西日本展は平成23年2月23日(水)

から27日(日)まで奈良県文化会館(奈良県)で開催。関西総局、甲信越、北陸、山陰、山陽、四国、九州支局の全作品を展示。

○会場見学会
(実行委員長 小林琴水)

西日本展は平成23年2月23日(水)

から6日(水)までせんだいメディ

アパーク(宮城県)で開催。東京、南

東日本展は平成23年4月1日(金)から6日(水)までせんだいメディアパーク(宮城県)で開催。東京、南関東、北関東、東北総局、北日本、北

作業も従来とは異なり大変であったが、ベテラン委員の方々によって大過なく遂行できた。

11月30日、役員から一般公募までの全作品の書類、作品搬入、受付、整理を行った。

12月11日、一般公募作品、無鑑査の方の鑑別審査が行われた。(於、共和

会館) 12月12日、審査会員候補に対する大賞選考が行われた。(於、共和会館)

12月13日、審査会員に対する峰雲賞選考が行われた。(於、共和会館)

それぞれについて細かい心配りと綿密な計画のもとに作業が進み、よい審査を行うことができた。感謝申し上げたい。

○陳列部
(副部長 福島李舟)

12月11日、一般部公募と無鑑査の方

の作品について鑑別審査を行う。バリ

コード化もあって審査、事務処理とも

順調に進められた、入賞率の上限下限

についても原則適用をやや弾力的に行

い出品者にとって不利の無いよう考慮された。

○審査部
(副部長 江本興舟 小島孝予)

12月11日、一般部公募と無鑑査の方

の作品について鑑別審査を行う。バリ

コード化もあって審査、事務処理とも

順調に進められた、入賞率の上限下限

についても原則適用をやや弾力的に行

い出品者にとって不利の無いよう考

慮された。

○会場運営部
(副部長 関西総局長 実行委員会)

出品点数の多い漢字、現代詩文書部

の委員の方々には事務処理などご苦労をお掛けした。

12月12日、審査会員候補に対する大賞選考が15名の委員によって行われた。

各部より10%の枠で候補を選考し、更に2を全体選考対象として絞り、選考委員全員による投票により各部ごとの

序位を決めた上で、漢字から前衛書部までの5部門トップ作を並べて最終投

票。大賞に漢字部、大阪の上田多恵子

さんを決定。更に準大賞5名を投票により決定。白雲・紅梅賞10名は各部のシェアを考慮した上で最終的にはやはり投票により決定した。

12月13日、審査会員に対する峰雲賞選考が8名の委員によって行われた。

各部より20%の候補、更に1/2に絞って、全員投票の結果、現代詩文書部、宮城の尾形澄神さんが峰雲賞に輝いた。

審候、審査会員を含め、候補作品には青シール(審候)、赤シール(審査会員)を名札に貼付、入賞一覧に候補作品名を掲載したプリントを参観者に配布した。

○会場運営部
(副部長 上柳佳規 清水翠隆)

中央展は東京セントラル美術館と銀座画廊美術館で開催。財団役員のほか上位入賞作品を中心とした280点余の作品を

陳列。漢字、かな、現代詩文書、篆刻、前衛書の5部門それぞれのよさを活かす展示の工夫もあって見どころの多い書展であった。

○会場運営部
(副部長 種谷萬城)

2月5日、帝國ホテル富士の間に於て、作品研究会を行った。運営委員長辻元大雲の総合司会により進行。

まず、恩地会長により、全部門の代表作について、スライドを使って、よさや見どころの解説があった。中でも名

著顧問村野大仙先生の「卯」について「完成された大仙垂手の一项点である」と絶賛。

○会場運営部
(副部長 半田藤扇)

2月5日、帝國ホテル富士の間に於て、作品研究会を行った。運営委員長

辻元大雲の総合司会により進行。

まず、恩地会長により、全部門の代表

作について、スライドを使って、よさ

や見どころの解説があった。中でも名

著顧問村野大仙先生の「卯」について「完成された大仙垂手の一項点である」と絶賛。

○会場運営部
(副部長 半田藤扇)

統いて漢字部大野、かな部下谷、近

詩部斎藤、篆刻・刻字部宮澤、前衛書



恩地会長による作品解説



会場風景（中央展）



上田多恵子さん謝辞



尾形澄神さん峰雲賞受賞

部浜谷、香川先生方の特別賞選考委員により、各部の入賞作を中心に解説。
 ○表彰式・祝賀会
 日書道会専務理事・糸賀靖夫氏をお迎えし、表彰式を行った。

部浜谷、香川先生方の特別賞選考委員により、各部の入賞作を中心に解説。

（担当 恩地春洋・辻元大雲）

峰雲賞以下の各賞が財団の理事によつて授与された。糸賀氏には毎日賞の授与とともに激励のご祝辞をいただいた。係の誘導の手際よさもあって極めてスムーズに進行。

受賞者を代表して、大賞受賞の漢字

部・上田多恵子さんより謝辞があった。

祝賀会は帝國ホテル2階の孔雀の間を会場とし、総合司会 天海矩子・見越雪枝さんにによって17時開始。本年は通常年に当たり、毎日新聞社はじめ評論家、報道関係の方のみ限られたご来賓をお招きした。祝宴には総勢六百余名の参加があった。大野祥雲常務理事の開会、恩地春洋会長、辻元大雲理事長の主催者あいさつがあった。続いて毎日新聞社事業本部長・堂馬隆之氏、評論家・田宮文平氏、東京国立博物館学芸部長・島谷弘幸氏からご祝辞をいただいた。乾杯は毎日書道会専務理事・糸賀靖夫氏のご発声で開宴。和やかに宴は続いた。

恒例の入賞者紹介に移り、峰雲賞受賞の尾形澄神さん、大賞の上田多恵子さん、以下順次各賞受賞者を壇上で紹介。また、本年度各分野で受賞された方々の紹介があつた。

○浜谷芳仙・地域文化功労者文部科学大臣表彰
 ○辻元大雲・平成22年3月紹綏褒章
 ○今野深泉・多賀城市・塩釜市教育文化功労者
 それぞれの先生方を拍手で祝福した。

閉会は小竹石雲・実行副委員長が述べ宴を閉じた。

○部長 石井明子
 ○副部長 麻生峰扇
 ○副部長 奥田瑞舟
 ○祝賀会担当

○運営事務局
 本展運営の全般に関わり、事務処理を担当。膨大な事務作業をコンピューターを駆使して、事務処理担当のリンクス社との連携を密にして行う。出品個票の出力、搬入統計の集計、審査結果の通知、陳列計画、出品者登録作成、作品配置、祝賀会座席配置など総務・審査・陳列・祝賀会・会計などあらゆる部門の事務処理に関わっていた

○実行委員長・小林琴水
 ○実行副委員長・小林琴水

○会計部
 院の台所を預かる会計部は全ての部署との連携を保ち、陰の支えとしてご努力をいただいた。緻密な計画により、誤りなく処理していくべき感謝申し上げます。

○西日本展
 （部長 白石和楓）
 （副部長 東福青篁）

2月23日より27日まで第64回書道芸術院展西日本展が、奈良県文化会館で開催された。関西総局の方々の総力で盛り上がりのある書展にしていただきたい。この開催についての詳細は小林琴水実行委員長より報告とする。

閉会は小伏小扇・相談役が述べ宴を閉じた。



乾杯!! 毎日書道会糸賀専務理事

特集：第64回書道芸術院展

た。陰の努力に感謝申し上げたい。

(事務局長 千葉蒼玄)
(事務局次長 三浦鄭街)

第64回書道芸術院展西日本展

実行委員長

小林琴水

2月23日（水）～27日（日）まで奈良県文化会館にて開催（関西、甲信越、北陸、山陰、山陽、四国、九州）と財団役員、上位入賞作品、1028点を展示、陳列担当の前田龍雲さんは、頭をひねつていましたが、自信をもって絶対に入りますと言われ、その通り見事陳列完了。少し窮屈な部屋もありましたが、私達展示出来たことに胸をなでおろし、ホッとしました。上位入賞作品は、立派な陳列ケースに展示、輝いていました。

陳列終了後、明日の開幕の準備に移り、

玄遠社理事長の吹田紅扇さんの指示に従がって、一致団結、一階、二階の会場当番など、皆さんに協力いただき、アツという間の5日間でした。

閉館、前日の26日（土）が顕彰式、祝賀懇親会、於・ホテル日航奈良・で行われました。280名の参加者で盛大な懇親会となりました。甲信越、四国からはバスツアーで作品鑑賞、奈良観光を兼ねて、たくさんのご参加をいたぎ、びっくりしました。また地元の方は、芸術院展の作品をこんなにゆっくり拝見出来たのは始めてです；といつも東京に行つてもかけ足で見て、表彰式、懇親会とバタバタして帰阪、今回は役員の先生方の作品、仲間の作品もじつ

くり見ることが出来、いい勉強になりましたと、喜びの声が多かったことは、とてもよかったですと思いました。また、家族やお友達にも見に来てもらつた方が多く、時にはこんな機会があればいなと思いました。

顕彰式は、大賞から褒状までの受賞者を全員舞台に上がっていただき、芸術院幹部の先生、理事長・辻元大雲先生、大野祥雲、下谷洋子、浜谷芳仙、小浜大明、牧泰満先生方から、レイをかけていただき、受賞者全員、笑顔でとても、嬉しそうでした。顕彰式が終り、祝宴に入り、毎日書道会、関西支部長藤井英一様よりお祝辞をいただき、約300人近い方々のご出席でなごやかな祝宴がはじまりました。受賞者は、いろいろな色のレイを首に嬉しそうな顔で先生方へのお酌にまわっておられる姿はとても印象的でした。

閉会は、小伏小扇相談役が述べ宴を閉じました。



会場風景（西日本展）

評論家の眼



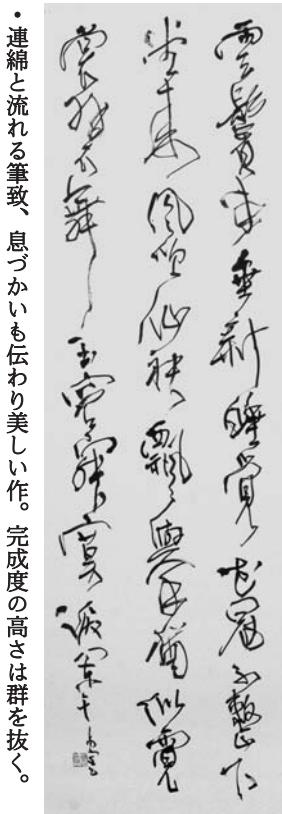
漢字部

村山元信

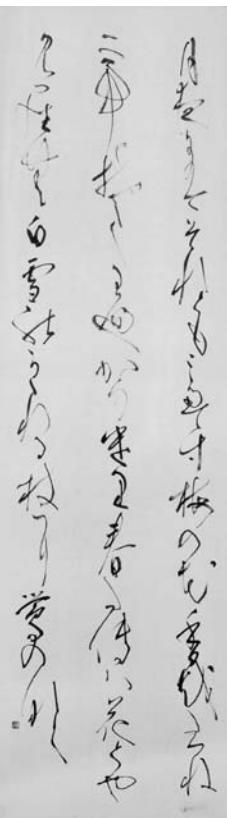
島谷弘幸の眼・軽妙な筆致でありながら、行末、行間処理などが卓越しており、安定感あり。

田宮文平の眼・2尺×6尺の横形式に中字で11行、小字で6行に標題白居易詩を書く。独特の抒情的な筆致が爽やかである。

漢字部
漢字部



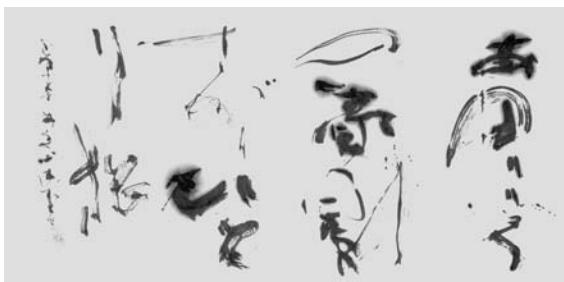
西林乘宣
かな部
かな部



奥田瑞舟
前衛書部
前衛書部

島谷弘幸の眼
評論家の眼

島谷弘幸の眼



現代詩文書部

• 巧みな運筆と墨の濃淡で奥行きが感じられる。連綿と独草のバランス、余白が心地よい。

• 存在感のある筆の線と余白の調和が見事。直線とうねりのある筆の動きの跡が実に美しい。



大石利一
前衛書部



現代詩文書部

西岡雨瑠



刻字部

久保田廣

評論家の眼 田宮文平の眼

漢字部

小伏小扇

前衛書部

真下京子



・意表を突く造形力に発想の大胆さと清新さがある。一作一面貌の発表で自刻と思われる白文印も見事だ。



・タブロー感覚の繊細な表現が素晴らしい。淡いパックの上に細線の書きが巧みに生かされている。

13

用紙 半紙普通判 左の法帖の中から
何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
（押印のみ也可）

〈解説〉

九成宮醴泉銘は、その比類なき整齊な美しさから、古来より「楷書の極則」といわれてゐる。この楷書は、一点一画がほんのわずかずれただ

けでも、字形がバラバラになってしまふ、と思われるほど厳密な構成になつてゐる。さらに一つ一つの点画の長短・軽重・強弱などこれほど細部まで計算されたものは他にあまり例がない。

金無鬱蒸之氣微
風徐動有淒清之氣微
涼信安體之佳所之氣微
誠養神之勝地漢所之氣微



(91%縮小)

特別研究部臨書課題

＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

12.7センチ×12.4センチの枠を半紙（料紙可）に書いて、

その中に書く。（落款は枠内でも、枠外でも可。）

※落款を必ず入れる。署名、

もしくは〇〇臨
（押印のみ也可）

用紙 半紙普通判（料紙可）
〈たて長に使用〉

別紙を裁断して貼付は不可。

＝寸松庵色紙は、上の掲載
部分を全臨する。

〈よみ〉

むめのかをそでに無可所専

解説

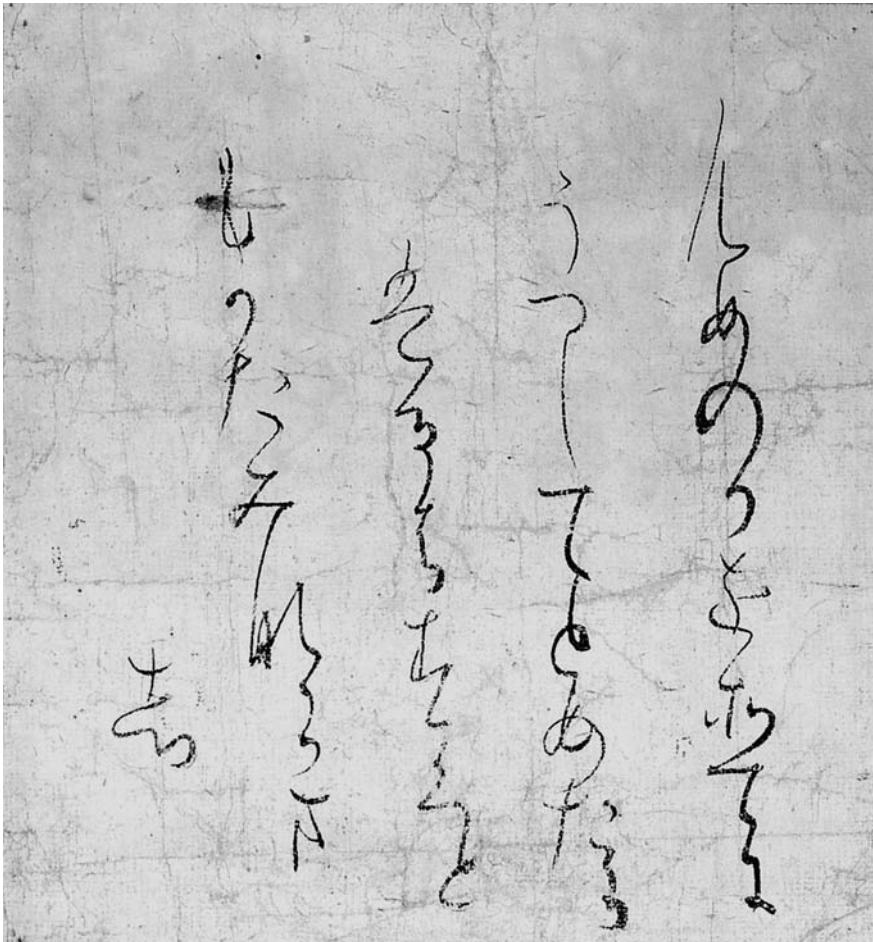
寸松庵色紙は、古今和歌集の四季の歌を、詞書を省いて一面に一首を方形の料紙に散らし書きしている。（歌の作者名も書かれているものもある。）

もとは粘装の冊子本で、料紙は中国製の唐紙、筆者は貢之と伝わるが11世紀の末ごろの書写と推定される。

寸松庵色紙の線質は、概ね、豊かな厚みの立体的な変化が特徴で、筆者の力強くも温かく、深い呼吸が際立っている。

（は）はるはすぐと
もかたみならま

しほ



習い方解説 (二)

大野祥雲

無心者公

「無」筆順、三つの横画の長短と間隔、四つの縦画の変化など、筆を執る前に考えたいことが多い。

烈火についても表現はさまざま。「心」一画の力強い点を弾き上げ二画目は高い所から細線で切り込むが、はねでは全開。続く終画の二点を連ね、響きのある線にした。

「者」一、二画目の横画は鋒先を利かし、二画目の縦画は鋒先を開いて大胆に。その後の斜画と日、閉閉を生かして運筆。日の内部には白をとって明るくした。

「公」一、二画目はそれぞれ強く深く切り込むが、方向に注意。ムは大きめにして、他の文字との調和を考えた。

無心者公 よみ（心無き者は公なり）



書体=自由

漢字規定秀級以下【六月十五日締めきり】用紙半紙普通判

小竹石雲選書

習い方解説 (二)

萬法歸一
(碧巖錄四五)

小竹石雲



万法（森羅万象）は一（絶対的な真理）に帰着するの謂です。

鄭道昭の悠然とした書風で書いてみました。

鄭書は円筆といって筆の起收のはつきりしない丸みを帯びた点画で書かれています。碑面が風化して、線に独特の味があり、字肌の荒れが、その良さを助長しているのも事実でしょう。清の包世臣が鄭羲下碑を「篆勢（篆書の筆勢）分韻（隸書の韻致）草情（草書の情趣）畢く其の中に具う」と評しているように、勉強になる要素が多く含まれています。中鋒のやや粗い羊毛筆で書いてみました。紙のにじみ、かすれも十分利用して氣宇雄大で力強い表現を工夫しましょう。

萬法歸一 よみ(萬法一に帰す)

書体=楷書

習い方解説 (二)

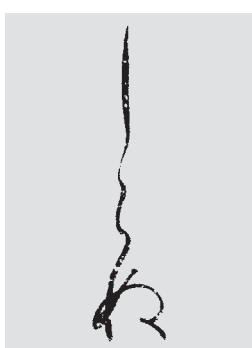
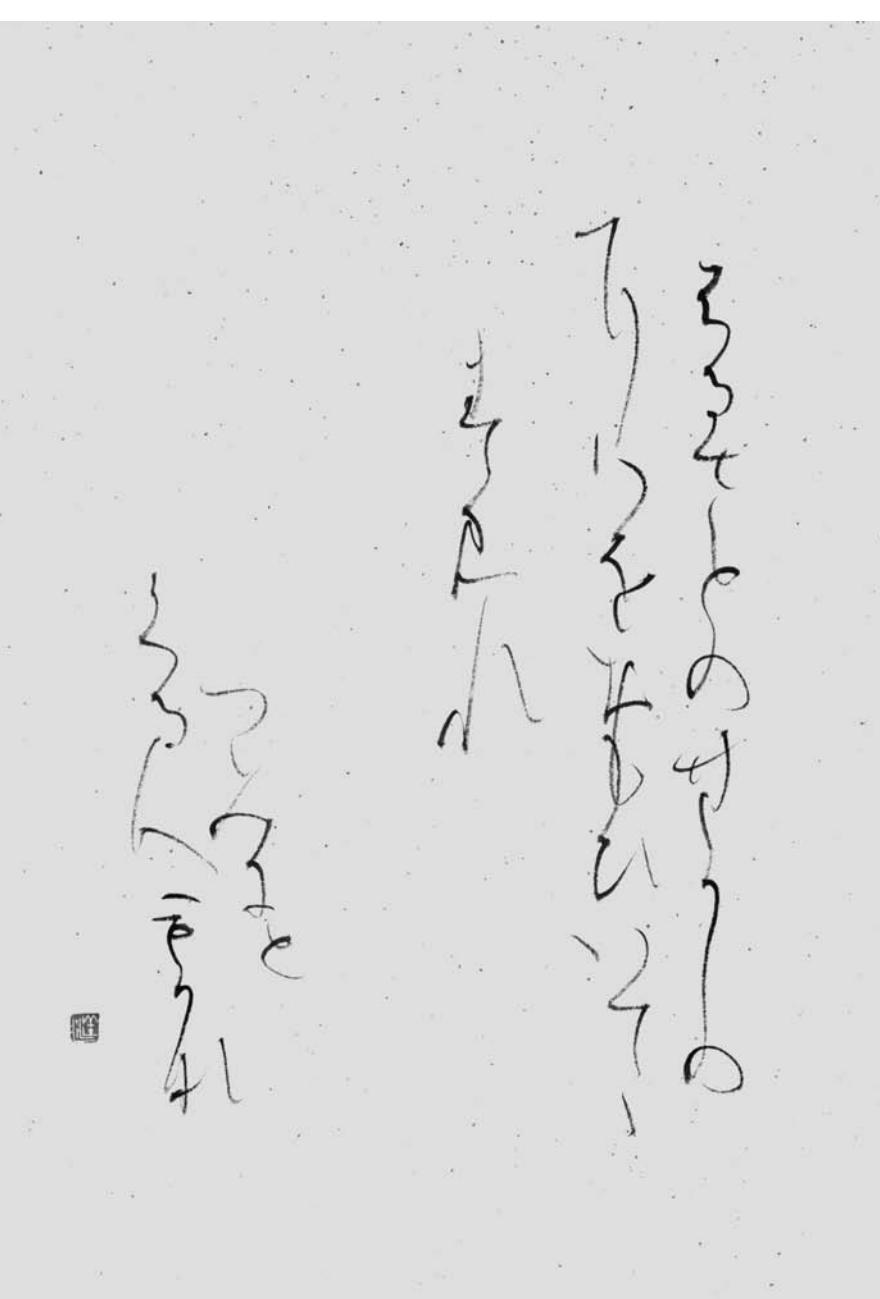
下谷洋子
ふるさとの昔の庭を思ひ出でて
すみれつみにと来る人もがな
(山家集)

どんな筆を使っていますか?
かなの線は硬直した筋張った線で
はなく、温かく膨らみのある線が
基本です。イタチ、玉毛、毛質は
問いませんが、図版の高野切一種
に見る基本線を思い出しましょう。
自然に軽やかに筆の開閉が出来な
いときは、筆が小さいか、下ろし
方が足りないので。しかもかな
の筆はすぐ傷みます。書きやすい
ものは何本か用意して交代で使い
たいですね。かなの形は、行の流
れやリズムの中でいろいろ姿を変
えますので、第一に弾力のある線
が書けないことにはいくら姿が整っ
ても、心惹かれるかなの線は書け
ません。

よみ方

ふ(不)るさとのむ(無)か(可)しのに(耳)は(八)をおもひいでて(レ)
す(春)み(見)れつみに(尔)とく(久)る人も(毛)が(可)な(那)

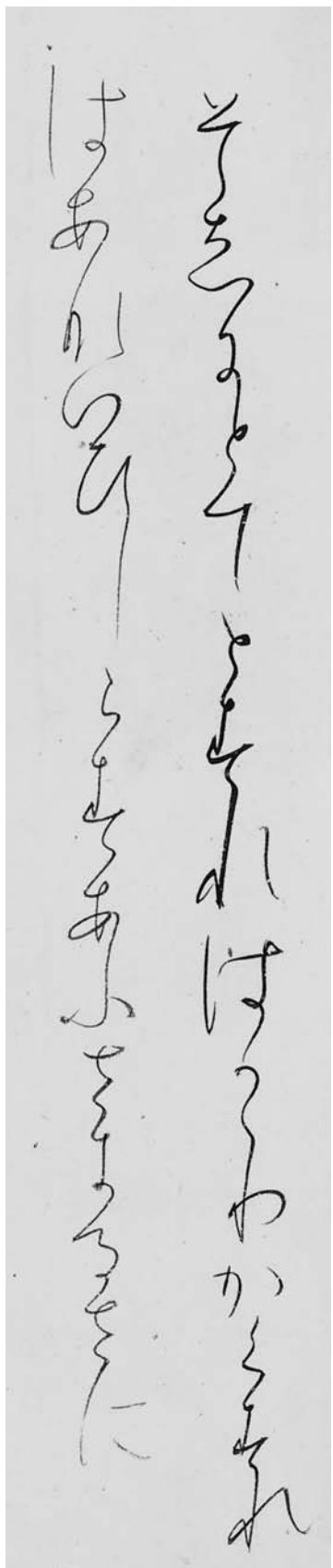
創作



かな規定 秀級以下 【六月十五日締めきり】 用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)

掲載写真のうたを全體、または部分(二字以上の連綿)を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 そゑに(尔)とてとす(春)ればか(可)ゝり(利)かく(久)す(春)れ
ばあな(那)いひしらず(春)あふさき(支)るさに

習い方解説 (二)

かな条幅規定【六月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

天海矩子選書

天海 矩子

ほとゝぎす音羽の山のふもとまで
尋ねし声をこよひ聞くかな
(金葉集)

横形式の場合、一行の文字数が

少ないので流れが出しにくい。そ

こで文字を連綿することや散らし

書きで行の長短の変化を考えます。

今回は行書きで漢字を多く使用し

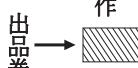
たため、七行になりましたから横

に張る字形も使い、余白が生ける

ように心掛けました。行書きの場

合八行程度にまとめる落ち着き

創作



出品券

→

貼付位置

*ヨイJ形式に限る

よみ方 ほとゝぎす(時鳥)音羽の山(や満)の(農)ふもと(麓)まで
尋(多つ)ね(年)し(志)声(聲)を(越)こよひ(今宵)聞くか(可)な(那)



漢字条幅規定 初段以上 [六月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

名越蒼竹選書

習い方解説 (二)

名 越 蒼 竹



野桃笑竹簾短 溪柳自揺沙水清
(野桃笑ひを含みて竹籠短かく 溪柳自ら揺いで沙水清し)

書体=自由

漢字条幅規定 秀級以下 [六月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

種谷萬城選書

習い方解説 (二)

種 谷 萬 城



王不磨無光
(玉磨かざれば光無し)

實語教

書体=自由

課題の語は「優れた才能や素質があつても練磨努力しなければ開花しない」の意です。書の向上も、日頃の地道な学書の積み重ねが大切です。今月は、龍門造像記を倣書しました。点画が角ばり、豪快で、迫力ある古典です。原本を鑑賞・臨書し、気迫溢れる楷書の書法をしつかり学んでください。

二回目は小篆体で試みました。構築性が高く、安定した運筆が求められるこの書体はまとめるのがなかなか大変ですが、分間布白の整齊さ(緊密さ)を学ぶのに最適です。用筆の上からも起筆における藏鋒、収筆における穂先の立ち具合にも心したいものです。六字目の「簾」は「離」八字目の「溪」は「谿」で代用しています。

習い方解説 (二)

上 柳 佳 規

ほのぼのと赤い二十里の大気にうかぶ槍や穂高が
私に流離の歌をうたう。

牧柵や蝶や花や小川が、
存在もまた旅だと私に告げる。

尾崎喜八 牧場の春より 佳規かく

「ほのぼのと赤い二十里」は、かつて、水田へ肥料として犁（す）き込んで蓮華草が、一面に真っ赤なジュウタンを敷きつめたように咲いていた安曇野の光景が浮かびます。

尾崎喜八には、旅の詩がたくさんあります。その一つ「牧場の春」の一節です。真っ赤なジュウタンの遙か先には、雪を頂いた北アルプスの雄姿が陽炎（かげろう）に揺れている遅い信濃の春です。

横画の間隔に気をつけて書いて下さい。

◎常用漢字、新かなづかいによりました。

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

※落款を入れ忘れないようにしてください。

今月の

ホープ作品
各部総評

No. 599

ベン字部 師範 永瀬 薩汀

一字ずつが非常に丁寧で、筆致も懐が広く、全体的な流れを美しくまとめあげた格調高い温和な作。

◎ベン字部総評 漢字とかながら度半々の課題。流れ、布置等、努力作が多くよい傾向と思われる。

新年度、益々のご研鑽を。(和楓評)

雛祭。三月三日の桃の節句に行なう。ひな壇を作り、ひな人形を飾り、ひし餅、白酒、桃の花などを供える。古くは『源氏物語』にも出ていた。草の戸も住替る代ぞ雛の家芭蕉句

漢字条幅部 師範 今関 梨霞



造像記風の楷書に正面から取り組み、線質、造形、章法共に質の高い作品に仕上げている。

◎漢字条幅部総評 古典を着実に学び、確とした書法で創作をした作品が目に止まった。地道な学書を期待。

(萬城評)

かな条幅部 準師 小池 桂子

大きく動きながら静けさ漂う工夫したよい作品が多かった。変体がな遍に誤字多出。旧かな遣いについても研究のこと。(明子評)

法門之領袖也幼懷貞

梨霞書



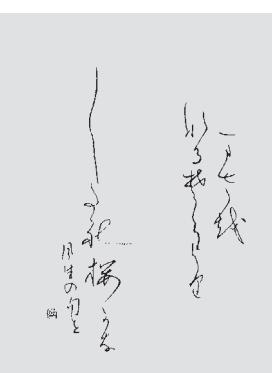
かな部 師範 増田 佳子

美術



まず、自然でよい。ソフトな筆触に無理がなく、文字の大小も適当。さらに多様さを求めて下さい。

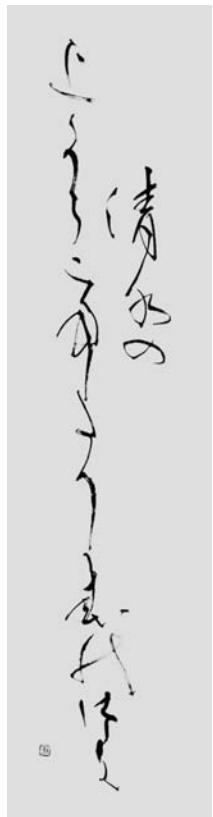
◎かな部総評 小さい、細い方が大きさや線の太細を再度認識したい。筆も一考のこと。(洋子評)



前衛書部 特選 高原 景子

鋭い線で疎密を大胆に表現された作品。無駄な線もなく、格調の高くなっている。

◎前衛書部総評 創意工夫の作品が多いが、大胆な表現法の作品が少ないようだ。(洞仙評)



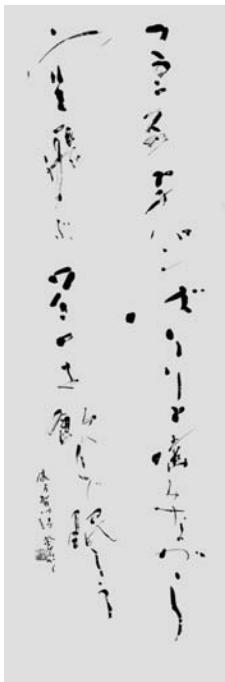
現代詩文書部 特選 進藤 寿子

スッキリとした作風で余白が美しい。筆の穂先を巧みに駆使し、構成、線質、墨色とも素晴らしい。

◎現代詩文書部総評 極端な構成と構成に無頓着な作風がある。いずれも線質の追求を!!(素雪評)

漢字部 師範 鷺山 美梢
しつとりと落ち着いた行草表現は無理なく安定する。大小潤滑の変化も自然でよい。

◎漢字部総評 上級草書表現作多かつたが筆力不足目立つ。古典臨書等基礎力をしっかりと身につけることが肝要。下級も同じ。(大雲評)



178×60cm

市川紫泉書

(八戸) 現代詩文書

市川 紫 泉

「俵万智の歌」

- ◆明るく爽やかな作。濃墨を柔毫筆で紙面に軽やかに舞う。リズミカルな筆致が音楽を奏でるように美しい。
 - ◆作品からリズムが湧き出て思わず身がゆれる感じ。細い線の鋭い動きをパッと太い線で受け止め妙。(倫子評)
 - ◆歌の作者と心が見事に一致した作品と見ました。表現力豊かな楽しい作品です。印まで配慮されまし。(明子評)
 - ◆ブドウの房のように点と線がならんで心地よい。潤渴もよく上等のワインを飲んでいるような香りがある。
- (蒼玄評)

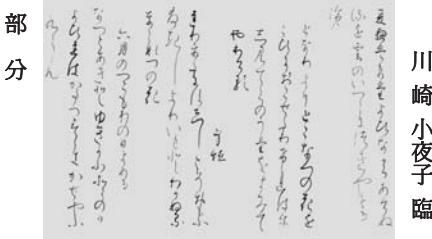
臨 書 (うるいど)

川崎 小夜子

「関戸本古今集」

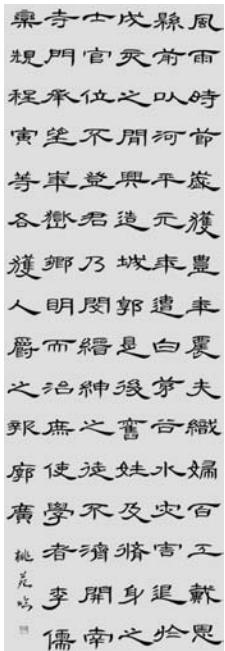


55×139cm



部 分

川崎 小夜子 臨



162×58cm

木元桃苑書

臨 書 (昌苑)

木 元 桃 苑

「曹全碑」

- ◆一字一字の観察が細かい所までよく気がとどいて作品をまとめてある。ゆったりとした所が魅力的。
- ◆面が立体に見える力に魅了される。丁寧な運筆が技術の高さを伝え、書くことへの深い愛を思わせる。(明子評)
- ◆伸々とした曹全碑を最後まで固くならずに優雅に運筆している証拠。創作表現への展開を期待したい。(大雲評)

◆関戸本の特徴をよくとらえ、的確な筆づかいと太細、大小の変化、潤渴のバランスもよくまとまる。(大雲評)

◆書き進むに従い、技も心も深く入り込んでゆく熱意を見せられました。厚みのあるかの魅力全開です。(明子評)

◆毛筆で表わせる美しさが充分發揮され、この長編を前衛一筆で見せてくれる。特に細い線が見事。(倫子評)

創作の部		現代漢字	
かな	9点	かな	6点
前衛一筆	16点	現代漢字	14点
篆刻	2点	篆刻	2点
漢字	1点	漢字	1点
かな	25点	かな	6点
点	点	点	点

総出品点数
78点

〈特選候補者〉

〔漢字〕

〔創作の部〕

「漢字」	「漢字」	「漢字」	「漢字」
墨宣	小林	翠芳	前衛一筆
千葉	板橋	雅邦	篆刻
華祥	安藤	秀扇	漢字
大雲	松村	邦	かな
陽陽	岩崎	梅道	2点
もうる	橋	由紀	16点
華祥	安藤	華祥	14点
大雲	長島	陽光	14点
陽陽	陽	英晴	14点
もうる	鈴木	英晴	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀	邦	14点
陽陽	華祥	邦	14点
もうる	梅道	邦	14点
華祥	由紀	邦	14点
大雲	華祥	邦	14点
陽陽	梅道	邦	14点
もうる	由紀	邦	14点
華祥	華祥	邦	14点
大雲	大雲	邦	14点
陽陽	陽	邦	14点
もうる	鈴木	邦	14点
華祥	梅道	邦	14点
大雲	由紀		

漢字研究部
(曹全碑)

選評 竹田尚堂

今月のホープ作品



佐藤桂香

漢字研究部 特選 佐藤 桂香

小字多字数作品ですが、八分隸の用筆を手の中に収めた上で、曹全碑の流麗で雅な風韻を的確に捉え表現されています。原帖の深い觀察眼、練度の高い筆線によって為されるもので、木目濃やかな学書姿勢が窺えます。

◎漢字研究部総評

筆を執る前に原帖をよく観ることが大切です。武蔵の謂を借りるなら「見てなく観」。



菊幸光律 惠彩
枝穂子子 舟炎

幸治美蘭 美絹
知子美紗 雪子子

喜春煌 惠由良
代子台 泉子起子

春美迪直 桃雲
華梢子子 菩苑卿

丁寧に観察してください。波磔を持つ横画や右払いの筆法の習得は勿論必須ですが、例えば、主画を引立てる他の画の有様、余白美を際立たせる結構など、この碑に具わる書美を生み出す原理原則を得たいのです。形だけを追つても構築性や質の高い書線が伴わないと“似て非なるもの”になります。「郷」の第一画欠落作多く、字書の活用を。

かな研究部
(関戸本古今集)

選評 田村澄子

今月のホープ作品

後藤良泉

◎かな研究部総評

三回目になり流石よく出来た作品が、数多くあります。只し、用紙の余り薄いものを使用すると、筆圧も変り、工夫が必要です。

かな研究部 特選 後藤良泉

この古筆の特質を、よく理解し、豊かな墨経ぎ、筆端を、ひっかけるようリズム感は、魅力的で、秀逸です。

かな研究部

(関戸本古今集)



雅寿翠
泉子舟

百幹佳
百合

由知愛
子生栄

蓉翠紅
汀蕙霞

彩 A 大卯竜高
I 雲月泉陵

秀五如竜 A 洞こ千広如千竜こう幕紅うこ順道石小調玉竜
明葉月泉 I 書だ葉島月葉泉だ泉る張率るだ縁 習汀布松泉

特選

秀

伊伊礎新浅會木
藤藤貝谷川木み

敏寿清嵐な勇
子耀泉江介

喜睦芳利昌楊彩雲南蘆博龍星雅壽翠合百幹佳起知愛

蓉翠紅良
子石汀蕙霞

芳松千五も椿千前

秀童泉大英有五千英竜高竜清調廣う英竹蒼玉澄た秀千和

蘭村葉葉く翠葉橋水泉会阪峰秋葉葉峰泉崎月布島る峰扇田松春か明葉平

渡茂村真松平平春富寺土田田田武高波佐櫻酒後小小熊木吉河小小字岩岩猪井

邊木田庭本山山澤谷中山橋谷藤田井藤林谷村瀬岡野川田田崎又上

タク理喜ま喜美

信翠笑ツ彩勝悟悟可美蒼芳正愛桂龍恵知嘉雅紫順彩星理彩春春洋理英

溪芳華ミ伴子華美子子江三枝子枝子華香貞子子江子蘭子雨扇給香華董子扇二

松村入

明も竹千樹や佐も紅春梵澄 千澄大泉大東は千正艸玉卯や幕紅正治大英大四幕大彩生東蘭泉翠柳翠 A 前千八正 もく

漢く美葉原ま倉く苑汀春 葉春雲会阪向せ字華玄葉月ま張瑤華田雲峰雲谷張版 大向鼎会柳葉街華

阿久澤隆

吉横湯遊山山森茂宮三宮松松増堀北比富長永永中遠津田高鈴神鳶驚齊高木北岸岸菊菅川小岡遠生碓今石新青

種本山本佐口田木野宅内重田切條田山谷守井澤山田玉橋木保本山藤武原村本田池野崎方井閑渡橋井木

千鶴藤蘭禮一律 藤真津白幸藍翠華幸靖代芝久 宏雅希幸哲賢智佳麻美早玄尚惠萩東善静優西翠珙美

子玉舟子米子毅谷蘭闇楊平華景秀雲子子香子薰枝子子雲広子子稍苗城子舟茜子高代子鈴園案子弘霞徑子雪子

八尾た湘咲

春竹昌稻や大京椿大赤東大竜若詢生玄生福大英大広詢 大伏春椿筑清東誠英 澄誠竜桂筑も春岩 大千椿京大

雲陽か南舟

汀美苑毛ま阪橋翠阪穂光雲泉葉扇大象大阪峰雲島扇 阪華汀翠桜月総和峰 春と泉月桜く汀沼 阪葉翠橋雲

七穴猿佐佐佐櫻坂齊廢近小小黑吳工工君木北川金片梶香小小押小冲岡大江薄鷦上宇岩入今井伊板石石生池飯安阿朝

條倉渡藤藤々木田卷藤藤林林暮柳 藤藤島下又崎岡野川川野野山熊 田西田澤原井瀬谷村野藤倉田崎駒田藤部倉

木木 由か 美

裕和冬詠ミ淳和智麗美つ喜松晃白祥竹豊山香春都春綾萩美紘富江萩純代和十一茂春琴岳楠祥悠貴玉悦藤喜正萩光代春爽

美子華子ヨ子子舟苑え萩春代江扇葉美房蘭翠子峠美美代苑子鉢光子子雲美子子美夫綠舟峰麗園花香子竹子子花溪彩子

ふ北八竹己澄あ英右生硯皓小山京詢稻有秀澄銚土や咲秀高澄泉

選み陸生扇未春か峰田大水映中王橋扇毛秋水春子氣ま舟水陵春会

151 吉湯山山柳本村村官松增前堀程細福福深深平平原花丹浪永長仲中中富都渡田田辰淹高高仙鈴杉菅新庄嶋島

名田田浅村根堀吉山田田澤田澤島川野村田島堀澤山田 里羽川田尾村西塚江田丸子原中中本田橋橋井田木原野谷司

氏名略

四惠炎美政明龍萩 草映功代魯蕙貴キ歌清佳優美京智惠秋時翠一游絢よ萩ど紀恵耶文光照志幸小孝春麗房萩翠咏祢由

子子秀子翠香峰堂満秋華子子春子子洗月子和子子花子峰琴溪子子彰り子子衣江子子朋苑秋子江子江碧光艸子香

かな研究部成績表

佳作

60書

佳作

60書